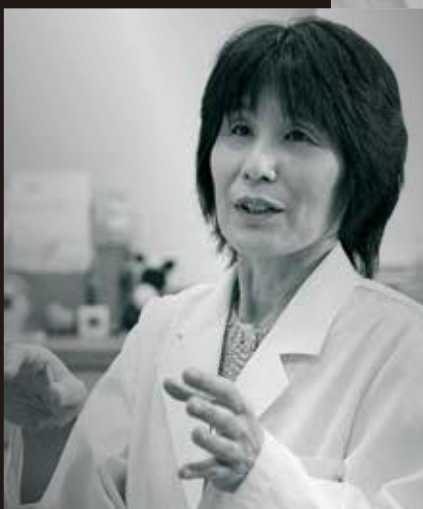
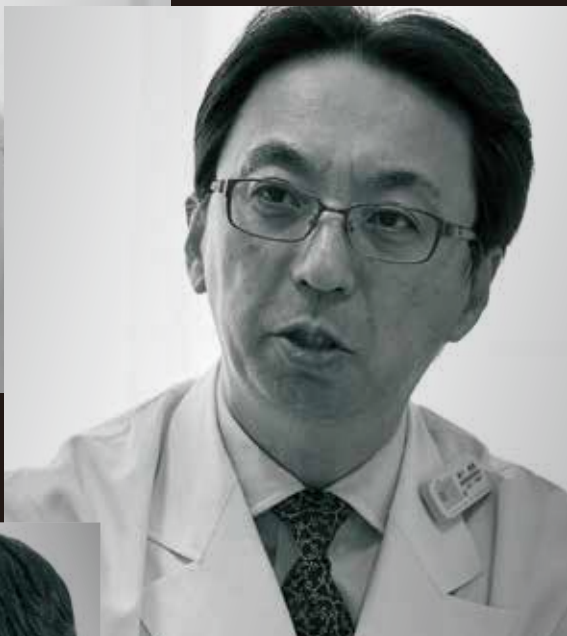
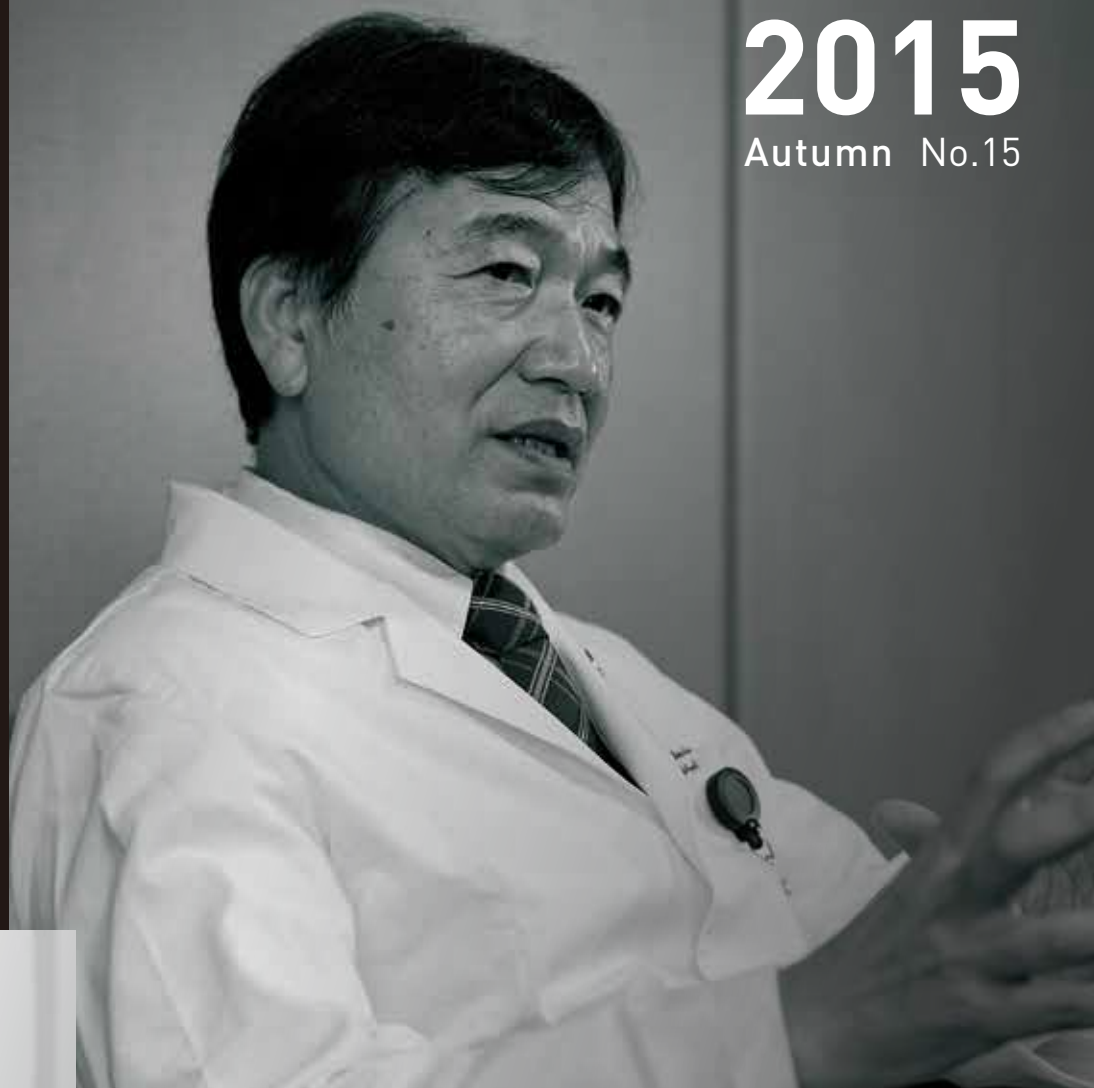


KLI NI KOS

ととりの医療(クリニコス)
2015 秋号



2015
Autumn No.15



スペシャルトーク

鳥取大学医学部附属病院 院長

清水 英治 氏

この医師にせまる

鳥取市立病院脊椎脊髄センター
診療局長

森下 嗣威 氏

主任部長(脳神経外科)

赤塚 啓一 氏

女性医師の視点

たじま医院

但馬 啓子 氏

鳥取の病院から

医療福祉センター

倉吉病院

鳥取の研修医たち

鳥取県立中央病院



三滝溪 つり橋と千丈滝

数々の奇岩、40余りの大小さまざまな滝が続く三滝溪。その中で、高さ80メートルを誇る千丈滝。つり橋からの眺めは圧巻。

KLINIKOS

ととりの医療
【クリニコス】
2015 秋号

ととりの医療

『KLINIKOS(クリニコス)ーととりの医療』は、

鳥取県で展開されている医療の魅力を、現役医師の皆さんの生の声で伝える広報誌です。

県内の医療機関ではどのような医師が活躍しているのか、どのような研修、チャレンジができるのか、素晴らしい先生方の取り組みや想いを、特に若い医師や医学生に発信したいと考えて制作しました。

ギリシャ語の「klinikos」は英語／clinicの語源ともなった言葉で、

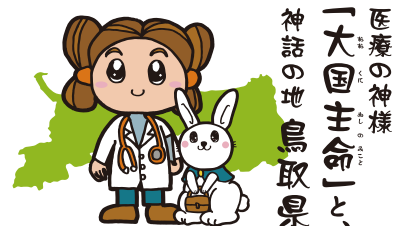
患者に対する医療行為を意味し、米語辞書の代名詞的存在であるウェブスター辞典では、「臨床講義」や「臨床講義室」をさす言葉として紹介されています。

この冊子に紹介されている先生方や医療機関の取り組みに

興味を持たれた方は、ぜひ現場を見学してみてください。

願わくば、この冊子が鳥取県で研修、勤務いただくきっかけになれば幸いです。

鳥取県福祉保健部健康医療局医療政策課



小さな「ありがとう」のために、大きな夢をのせて…
鳥取県が舞台と言われている神話「因幡の白兔」で、傷ついた兔を救った大國主命は、医療の神様とされています。



伯耆古代の丘公園

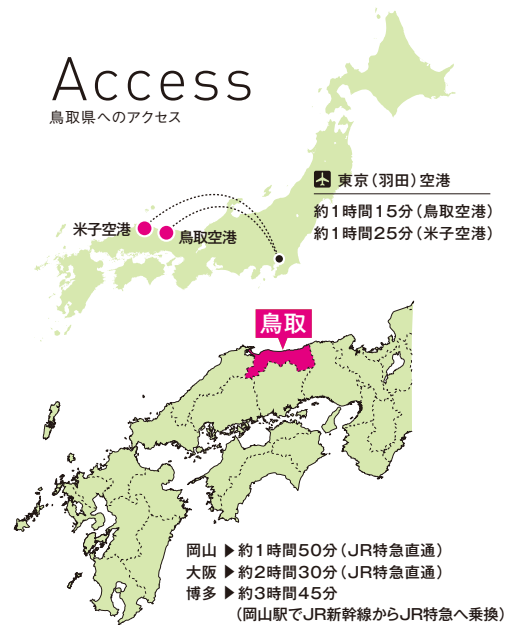
たくさんの古墳に囲まれた公園内には、2つの丘陵内に前方後円墳をはじめ総数17基が分布。前方後円墳の密集度では全国有数の規模を誇る。

Contents

- 02 Special Talk** スペシャルトーク
鳥取大学医学部附属病院 院長
清水 英治 氏
医師は、まず人を愛すること。患者さんを好きになることで正しい判断ができる。
- 06 Doctor of Topic** この医師にせまる
鳥取市立病院脊椎脊髄センター
診療局長 **森下 嗣威 氏**
主任部長(脳神経外科) **赤塚 啓一 氏**
整形外科と脳神経外科の異なる技術を用いた総合的な治療
- 09 Close Up Women's** 女性医師の視点
たじま医院
但馬 啓子 氏
女性ならではの経験が医師を続けていく上で役立っている。
- 12 Doctor's File** 鳥取の病院から
医療福祉センター
倉吉病院
6本の柱を掲げ、さらに積極的な役割を担う
- 15 Our Story** 鳥取の研修医たち
鳥取県立中央病院
総合的な視野をもった専門医を目指す

Access

鳥取県へのアクセス



Staff Credit

発行 ——— 鳥取県福祉保健部健康医療局医療政策課
(<http://www.pref.tottori.lg.jp>)

編集制作 ——— 【民間医局】株式会社メディカル・プリンシプル社
(<http://www.medical-principle.co.jp>)

ディレクター ——— 山之口 正和
ライター ——— 藤本 勉
カメラマン ——— 河野 義彦
デザイナー ——— 田尻 博美

友人の死をきっかけに
医師を志す

山陰地方最大規模697床の特定機能病院である鳥取大学医学部附属病院。2015年4月に病院長に就任した清水英治氏に、医師を志した経緯から、大きな病院のあり方、若い医師や医学生へのアドバイスなど多岐にわたってお話を伺った。

医師を志したのは15歳の頃。きっかけとなったのは友人が亡くなったことだった。「原因は喘息でした。友人のご家族が悲しんでいるのを見て、何かすることができないか、不幸から救うことはできないかと考えたのが、医師の道に進む始まりになっています」。その後、徳島大学医学部に進み、そこでも友人の不幸を経験した。「大学時代に同級生が喘息で亡くなりました。自分の友人が若くして2人も喘息で亡くなったことから、呼吸器に意識が向くようになりました。そこで呼吸器内科に進むことを決めたのです」。

がんセンターでの経験が
その後の道を決める

徳島大学で医師としてのキャリアをスタートさせ、2年目に国立がんセンターで研修を行うことになった。このがんセンターでの経験が、その後の医師としての道を決めることになった。「がんセンターにいた1年間で肺がんの患者さんを100名以上診ました。当時の内科で診る肺がん患者さんというのは、外科手術ができない方ばかりでした。効果的な薬もなかったため、内科でできることは限

られていたのです」。このような経験から、後に肺がんの研究を志すことになった。「肺がんは薬物などで治らない。それならば研究が必要だと考えたのです。1990年にアメリカに留学した当時、がんの遺伝子が発見され、私もその研究に没頭しました。私が研究したのはがん細胞を抑制する遺伝子です」。清水氏が研究していたのは、がんを抑制する遺伝子をがん細胞に運ぶというものでした。現在では、がん細胞の遺伝子そのものを抑制する方法が主流で、世界的に大きな成果を挙げている。

医師は、まず人を愛すること。
患者さんを好きになることで
正しい判断ができる。





鳥取大学医学部附属病院 院長

清水 英治氏

Eiji
Shimizu

広域での救急医療に対応するために設けられたヘリポート。鳥取県内のほか、鳥根県から搬送される患者もいる。



「肺がんの原因となる遺伝子が発見されてから、25年ほど経った現在、肺がん治療は飛躍的に効果のあるものとなりました。研究の成果が上がるには、20年、30年の時間がかかりますが、多くの医師に取り組みで欲しいと考えています。私が理想とする姿はフィジシャン・サイエンティスト。臨床も研究もどちらも大事なのです」と語る清水氏。かつては治らなかつた病気で現場で向かい合うと同時に、研究することも医師にとって重要な仕事なのだ。

大学病院は 仕事を生み出す場所

医師であると同時に、組織のトップでもある病院長。その立場から、現在の状況や目標を伺った。「現在、当病院で働く職員は医師も含め1750人です。米子市の規模を考えると、大きな雇用の場でもあります。来院される患者さんは1日約1400人、入院されている方は約620人ほどですから、人口集積が起きている場所とも言えます。この場所をもっと大きなものにしていくことは地域貢献だと考えていますので、機器の開発や薬剤の開発にも参加することで雇用の場を広げていきたいと思っています」。地方都市にとって大学病院は医療機関ということに留まらず、地域を支える経済体であり、地域を活性化させ

る場でもある。もちろん、医療機関としてのさらなる充実に力を入れている。「救急医療と地域医療、予防医学など基本的な部分をしっかりとすると同時に、低侵襲外科センター、次世代高度医療推進センターなど、先進医療の提供にも力を入れています」と清水氏は語る。ロボット開発で知られる(株)テムザックとも連携し、米子市内に(株)テムザック技術研究所が設立された。「テムザックさんが進出してくれたことによって、新しい雇用も生まれました。先端医療を進めることが、地域全体に貢献することになる例だと思っています」。

1999年に鳥取大学に赴任した清水氏は、さまざまな面から鳥取の魅力を感じている。「ここは私が育つた徳島県に比べるとお互いを思いやる気持ちが強いという印象があります。これは県民性なのかもしれないですが、対立する構造が少ないという印象です。大学のように大きな組織になると部署同士が対立するということとはよくあることです。鳥取大学ではほとんどありません。また、業界間の垣根も低いようで業種が異なっても連携してうまくやっっているのは鳥取のひとつの魅力ではないでしょうか」。

貧乏生活のスヌメ

「研修医には上を乗り越えるぐ

らいのパワーを持って欲しい」と語る清水氏。医療は頑張れば、自分をいくらでも伸ばせる分野だと言う。「『後生畏るべし』と言うように、若い人には可能性があるので、最大限の努力をして欲しいと思います。医学は経験学です。最初の5年間はしっかりと施設で勉強することが大事でしょう。医師になつて最初の10年ぐらいの間に、自分を飛躍させるチャンスが2回ぐらいはあると思います。その機会を逃さず、チャレンジして欲しいと思います。若い時は一気に伸びるものです」。自身の経験からくる若い医師や医学生に向けての熱いメッセージだ。「若い人には貧乏生活をして欲しいと思っています。私自身、研修医の頃はほぼ無給で働き、1杯200円の牛井で凌いでいた時期があります。貧乏生活によりハングリな気持ちになると、ひとつのことに没頭できます。ですから、若いときは将来に投資する気持ちで、目の先の損得に囚われずに行動して欲しいですね」。

「大学病院では、臨床、研究そして教育ができます。教育もまた私にとつて興味深い分野でした。当院の使命のひとつは医師を育てること」と語る清水氏。多様な教育ができる病院にしたいと考えており、鳥取県内の山間部にある病院とも連携し、総合医療の研修にも力を入れている。



患者の生活を丁寧に追いつながら、優しい表情で問診をすすめていく姿が印象的。



『愛人敬天』。
人を愛することが
すべての始まり

座右の銘は『愛人敬天』西郷隆盛が好んで使った『敬天愛人』から来ている言葉です。「私が師事した方の言葉が『愛人敬天』でした。西郷隆盛は、『天を敬い人を愛す』というこ

族を愛することが重要です。例えば、肺がんの患者さんで、手術か化学療法かあるいは何もしないのかという選択に迫られる時があります。医師として判断が難しい状況でも、患者さんが自分の親だったらどうするか、自分の子どもだったらどうするかと考えると、答えが見つかることがあります。これもベースは人を愛することだと思います。」

柔らかい語り口の中に、時に力強い言葉が響く。そこには、医療に対する真摯な気持ちが見え隠れしている。「医師の基本は人を愛すること」という理念を持つ清水氏は、医療機関のトップとして、多くの方の期待や責任を背負っている。

Profile



鳥取大学医学部附属病院 院長 清水 英治 しみず えいじ

医学博士 1953年生まれ、徳島で育つ、徳島大学医学部卒。
国立がんセンター、米国ベセスダ海軍病院、徳島大学病院などに勤務。
1990年米国国立癌研究所に留学。
専門は呼吸器内科学、膠原病内科学。
1999年鳥取大学に赴任、2015年4月より鳥取大学医学部附属病院 院長就任。
日本肺癌学会理事、日本癌転移学会理事、日本呼吸器内視鏡学会理事なども務める。

脳神経外科・脳ドック

脊椎脊髄センター

Doctor of Topic

この
医師に
せまる

鳥取市立病院脊椎脊髄センター
診療局長

森下

Tsugutake
Morishita

主任部長(脳神経外科)

赤塚

Keiichi
Akatsuka

嗣威氏

啓一氏

2013年、鳥取市立病院に開設された脊椎脊髄センター。

整形外科と脳神経外科の2人の医師を中心に、脊椎脊髄の疾病について、総合的な治療に当たっている。専門分野の違う2人の医師がタッグを組み、レベルの高い医療を提供している。



カルテを見ながら治療方針などを定期的に話し合っているというお二人。

整形外科と脳神経外科の異なる技術を用いた総合的な治療

鳥取市立病院の脊椎脊髓センターは、整形外科と脳神経外科のそれぞれ異なるテクニックを組み合わせたことで、より集約的で総合的な治療を行っている。整形外科医であり、同院の診療局長である森下氏は次のように語った。「疾病に対するアプローチの違いというのは実は医者ごとにあるのですが、それはいけなさと考えています。脊椎脊髓に関する疾病に対して、誰もが同じアプローチで対応するために、脊椎脊髓センターを立ち上げたのです。同じアプローチではありませんが、整形外科と脳神経外科ではテクニックが違います。お互いの良い

部分を組み合わせることで、幅が広く、高度な医療ができると考えています」。

全国的に人口が減少する中で、地方の医療は人材難が叫ばれている。鳥取県も例外ではない中で、医療技術を全国レベルに保ちたいという想いも森下氏にはある。「地方都市では人口が減少し、医師の数も減っています。専門的な医療ができる人が減っていく中で、脊椎や脊髓に関する医療のレベルを全国レベルに保つこともこの脊椎脊髓センターの役割だと考えています」。

2013年にセンターが開設されてから2年余り、徐々に認知が高ま

り、遠方からの患者も来院している。兵庫県北部からの患者も多いという。また、市立病院として、医療に関する市民講座を催し、さまざまな疾病に関する知識の提供に努めている。「鳥取の県民性なのか、我慢強い方が多いように思います。そのためにも多少の痛みは我慢して生活を続けて、悪化してから病院に来るといった例もよく見られます。そういう方に気軽に来院してもらうために、市民講座のような場は大切に考えています」と語る赤塚氏。加齢による症状と思いがちの方も多いので、病気を疑って欲しいと訴える。

普段からの人間関係を大事に、お互いが学び合う

「平素の人間関係が大事。普段から話をすることでですね。仕事のことはもちろんですが、プライベートのこともある程度知っている関係がいいでしょう。コミュニケーションはとろうと思って初めてとるといふ類のものではないと思っています」と語る森下氏。医師やスタッフ間で日頃からフランクに付き合うこと

の重要性を強調している。

森下氏と赤塚氏は、ひとつの手術を協同行うこともある。例えば森下氏が執刀する場合、赤塚氏がそれを見守り、必要に応じて確認や助言を行う。

「整形外科は、脳神経外科に比べて歴史が古いので、手術はもちろん、基礎的な知識や技術の蓄積があり、

いろいろ学ぶ所は多いです。森下先生は貴重な存在」と語る赤塚氏。森下氏は「赤塚先生が当院に赴任されたことで、脊椎脊髓センターが始まりました。それまで当院の脳神経外科は、脊椎や脊髓は診ていませんでした。赤塚先生の存在で脊椎脊髓に関してトータルで診療できるようになりました。育った土壌

医師は、自分の利益のための 職業ではない

が違うので、考え
方、テクニックなど
も参考になります
し、自分にできない

ことができるので、頼りにしていま
す」森下氏と赤塚氏はお互いに技術
を尊重し合い、また、お互い学び合
いながら、診療にあたっている。

謙虚にお互いの技術を学び合い、

尊重していく姿勢は、2人の医師と
いう職業に対する考え方にも通じ
ている。二緒に働きたい医師は、目
指している方向性が同じ方です。当
院にいる医師は、地域に密着して、
地域を支えていきたいというスタン
スの方です」と語る2人。医師を目
指す方や若い医師に伝えたいこと

も伺った。

「自分が医師になったばかりの頃
に付いた師匠的な存在の方に最初に
言われたのは『24時間365日、お
前は医者だ』ということ。病院
にいるときだけが医者ではないとい
う考えをたたき込まれました」と当
時を振り返る森下氏。赤塚氏は、
「医師として仕事を始めてしま



鳥取市立病院脊椎脊髄センター
診療局長
森下 嗣威 もりした つぐたけ

医学博士
日本整形外科学会 整形外科専門医
日本脊椎脊髄病学会認定 脊椎脊髄科指導医
日本整形外科学会認定 脊椎脊髄病医
日本リウマチ財団 登録医
日本体育協会公認 スポーツドクター
日本整形外科学会認定 運動リハビリテーション医

1986年 岡山大学医学部卒業
1998年 鳥取市立病院 診療部整形外科医長
2007年 鳥取市立病院 診療部部长(整形外科)
2012年 鳥取市立病院 診療局長

と、当たり前ですが『ずっと医者』と
いう状況になります。そうなる、と
病院の中や医療業界の中ばかりに
目がいきがちになるのですが、そう
ではなく、広い視野を持つて欲しい

と思います。広い世界を見ることで、
新しい知見に出合うこともあります
から」と自身の経験を交えて語る。

「向上心を持つて欲しい。知識や
技術を高めていく気持ちを忘れな
い、努力を惜しまない、楽をしてはい
けないのです。医師は人を相手にす
る職業。人に対する愛情や思いやり
がないとダメだと思っています。自
分の利益のために医師をするわけ
ではありません」と信念を語る森下
氏。医師を志す人は、多くの人から
影響を受け、人から育てられるのだ
から、決して独りよがりになっては
いけないという強い想いが伝わる。

常に学び合う姿勢と医師として
のスタンスが共通している2人。地
域の患者さんのため、地域の医療レ
ベルを維持、向上させていくための
歩みは、これからも続いていく。



鳥取市立病院脊椎脊髄センター
主任部長(脳神経外科)
赤塚 啓一 あかつか けいいち

日本脳神経外科学会 脳神経外科専門医
日本脳卒中学会認定 脳卒中専門医
日本脊髄外科学会 認定医

1986年 鳥取大学医学部卒業
2013年 鳥取市立病院 診療部部长(脳神経外科)
2015年 鳥取市立病院 診療部主任部長(脳神経外科)



鳥取市立病院
脊椎脊髄センター

整形外科と脳神経外科のコ
ラボレーションにより、頸椎か
ら仙骨にいたるまでの疾患に
対して統一した治療を行うこ
とを目的に2013年に設立。
それぞれの診療科の特徴を
活かした医療を提供している。

女性医師 の 視点

女性ならではの経験が
医師を続けていく上で役立っている。

たじま医院

但馬

Keiko
Tajima

啓子氏

1997年、小児科・内科の診療所として
開業した「たじま医院」。

但馬啓子氏は院長として、乳幼児から大人まで、
ひとつの家族を何世代にもわたって
診療している。地域のお医者さん。、
たくさんの苦労と喜び、女性ならではの
経験を活かし、地域の人々に貢献している。

「女性には…」という言葉に
迷わない強さ

「高校生のとき、医者になりたい
と先生に言った時には『女子が医学
部に行くとは結婚できないから、やめ
ておけ』と言われました」。但馬氏の
高校時代は、女性が医師を目指す
ことに、多少の風当たりがあったこ
とを窺わせる話だが、両親の理解や
自身の目標に向かって迷わず進む
強さを感じることができた。小中高
と陸上部だったが、大学ではバス
ケットボールをしたという一心で、

女子バスケットボール部を創設した
という行動力も但馬氏ならでは。
チェロも習い、室内合奏団に入部。
部活動で培った人脈は、現在でも役
立っている。ちなみに、現在は大学時
代にできなかった、着物を着てお茶
のお稽古に勤しんでいる。

但馬氏が小児科を目指したのは
医学部6年の時。もともと子ども
が大好きだったことから、小児科を
希望。「私自身が妊娠・出産・育児を





ひとりの人間として
自分の人生やりたいことや、
夢をもつことが大切です。

体験できたら、それが役立つと考えたのです。医局長にお話したところ、女性には大変な科だからよく考えたほうがいいと言われました。小児は24時間ケアが必要、体力的にも大変だと、気遣ってくれてのアドバイスでしたが最初の希望を貫きました。小児科に入局後は、さまざまな面でサポートがあったが、順風満帆というわけにはいかなかった。

出産、育児、介護 あらゆる経験を糧に

「最初の妊娠は切迫早産で、自宅安静の状態でした。半年間も仕事を休むことになったのです。その時は、仕事に復帰するのはもう無理かもしれないと思いましたが、今となっては、休んだ半年をもっと有効に使えばよかったと思うぐらいです」。

育児が「段落した頃に、認知症の母親の介護も経験。『自宅で最後まで

で看取ると決めました。だんだん動けなくなる母の食事や排泄の世話をしました。最後は寝たきりになり、目を閉じたままになりましたが、身体を拭いているとき、パッと目を開けて優しい目で見つめてくれたのです。それが母からの『ありがとう』に感じました。翌朝眠るように亡くなりました」と当時を振り返る但馬氏。介護の苦労はその瞬間に消えたそう。さらには自身が大腸がんとなり、患者も経験することになった。しかし、その全てが医師として、人としていろいろな経験になっていくという。「検診で大腸がんが見つかり、手術で切除しました。今は元気に診療しています。二日を大切に生きるためにも、今日できることを明日に延ばさないこと。検診を受ける重要性も患者さんに伝えていきます。『喉元過ぎれば熱さを忘れる』といっても、その時はつらく苦しく、そんなことは考えられない。



可愛らしい動物の編みぐるみは、お母様の手作り。院内の雰囲気づくりに役立っている。

また、自信をなくすこともあるかもしれない。でも時は止まっています。時は常に前へ進んでいきます。苦しい時期もつらい時期も時が進むうちに何とかなります」。いくつかの苦労を糧にして、医師を続けてきたからこそ、生まれてくる優しさや信念。自分の考えや思いを実践する行動力が但馬氏にはある。

子どもたちに本を。 テレビを置かない待合室

待合室には本を1332冊(取材時)も置いているというたじま医院。これも但馬氏の信念からだ。「私自身、父の影響もあり、子どもの頃から本が好きで、小学校の図書館の本を全部読むと毎日本を借りていました。子どもたちに本に触れて欲しいと考え、待合室にはテレビを置いていません。自分が感じてきた

たじま 医院



鳥取県米子市、住宅地として整備された錦海団地の中に位置する「たじま医院」。小児科、内科の診療を行っている。鳥取県西部という場所柄、鳥根県からの患者も来院する。

〒683-0825 鳥取県米子市錦海町1-10-6

本の良さ、面白さを子どもたちにも伝えたいと思っています。当院の本は、何冊でも無期限で貸し出ししています。子どもが本を持って嬉しそうにしているのを見ると、自然と笑顔になりますね。また、園医をしている保育園とその卒園生には、毎年本を贈っている。

東日本大震災の義援金も信念から行っていることのひとつ。「2011年3月から当院での健診・予防接種の人数に応じて、毎月日本赤十字社に送っています。原発事故のこともあり、災害は今も続いているという認識です。医療を通じてボランティア活動をしていきたいと考えています」。

夢を持ち続けること 相談できる窓口を持つこと

出産や育児、介護、自身の病気などを、前向きな生き方で乗り越えて



診察室でお話する但馬氏。常に取材スタッフを見回し、笑顔で対応する姿が印象的だ。

Profile



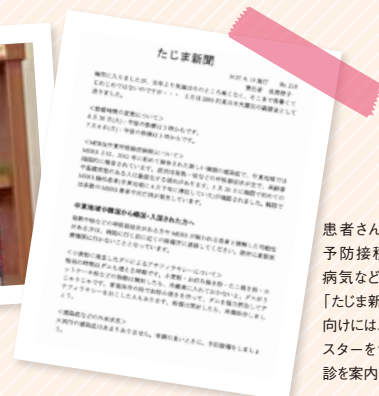
たじま医院 院長
但馬 啓子 たじま けいこ

- 1988年 鳥取大学医学部卒業
- 1988年 鳥取大学医学部小児科入局
- 1989年～ 鳥取大学医学部附属病院、
島根県済生会江津総合病院、
国立米子病院(現、米子医療センター)、
島根県広瀬町立広瀬病院(現、安来市立病院)
で小児科医として勤務
- 1997年 たじま医院開業

きた但馬氏。「ひとりの人間として自分の人生やりたいことや、夢を持つことが大切です。たとえ、今が忙しくても、いつかできる時が来ると信じていたい。夢をあきらめたり、なくしたりすると、人は目の前の辛いことに負けてしまいます。特に大学時代は色々な夢や目標にチャレンジして欲しいです」。また、自分だけで解決しようと思わないことも大切だと考えている。「相談する窓口をいくつも持つこと。指導医や同僚の医師、先輩や友達、鳥取には女性医師の相談窓口もあります。今の私があるのは、夫や子どもたち、両親、医院のスタッフのおかげです」。但馬氏自身も多くの方に支えられ、今日がある。但馬氏の生き方やメッセージは、そのまま、医師を目指す女性へのエールになっている。



1132冊の本は貸し出し自由。リュックサックに本を詰めて帰る子どももいるそうだ。



患者さんに健診や予防接種、流行の病気などを知らせる「たじま新聞」。小児向けには、手づくりポスターをつくって健診を案内している。

Doctor's File

鳥取の病院から



医療福祉センター

倉吉病院

鳥取県中部に位置する倉吉市。「医療福祉センター倉吉病院」は、鳥取県中部医療圏域では唯一の入院施設をもつ精神科病院だ。全国でも珍しい精神科の救急医療体制を整えることで、運営母体である仁厚会は社会医療法人となっている。「主役はいつも患者さん」が法人の理念だ。

鳥取県中部の 中核的な精神科病院

「精神疾患患者を地域で連携し、地域で支える仕組み」を目指し、鳥取県中部圏域精神科医療の中核的役割を果たしている倉吉病院。「24時間365日」の精神科救急医療体制は、全国でも珍しい取り組みとなっている。

また、日本医療機能評価機構による病院機能評価も受けており、2013年には4度目の更新をして



カンファレンスの様子。医師だけでなく薬剤師なども参加することがあるという。



各医師に用意されている個室。執務、休憩、食事などに利用される。



倉吉病院(写真左)と藤井政雄記念病院(写真右)。渡り廊下で結び、綿密な連携を図っている。

いる。「病院機能評価を受けているのは、単科の病院としては県内で当院だけです。評価項目はさまざまですが、例えば、病院の満足度やリアフリー化、経営状態の透明化などがあります。第三者機関による評価を受け、誰に対しても開かれた状態を保つことは医療機関として大切なことだと考えています」と、院長である田中潔氏は語る。

6本の柱を掲げ、 さらに積極的な役割を担う

現在、中長期的目標として『在院日数減少』に重点的に取り組む、外来では在宅機能を強化し、医療福祉サービス体制の充実を図ることを目指している。病院が独自に策定した将来構想として、『6本の柱(図1参照)を掲げ、地域で積極的な役割を果たせる医療機関と

して、体制強化を図っている。

「身体合併症の対策には早くから取り組んでいます。1985年に当院内に20床の内科を設置しました。その後1998〜2001年度まで、鳥取県から精神障害者身体合併症医療のモデル認定を受けました。現在、内科は当法人が運営

する『藤井政雄記念病院』に移りましたが、当院とは渡り廊下で結ばれ、一体的な治療が可能です。今後増加を続けると予測される認知症患者への対策として、2008年には、認知症患者医療センターを設置。地域のかかりつけ医師との連携を図っている。これらは一例だが、6本の柱全てに具体的なアクションプランを立て、実現に向かっていくのが現在の倉吉病院の姿だ。

Next Progress Project of Kurayoshi 倉吉病院の将来構想



図1

入院患者の疾病別構成割合
(2012年)

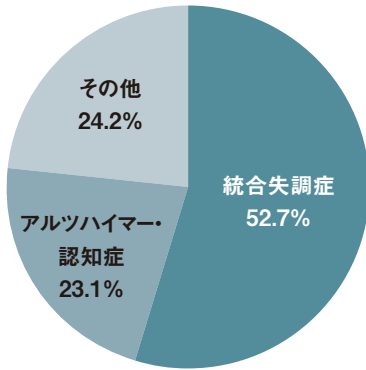


図2

「長所探し」 精神科の特徴のひとつは

現在、倉吉病院に入院する患者の半数は、統合失調症の患者となっている(図2参照)。「統合失調症の治療は主に薬物療法と心理社会的療法に分かれています。その中で薬物療法に対しては2000年頃から単剤化に取り組んでいます。精神科の薬物療法は長く多剤多量投与が一般的だった。しかし、患者の飲み忘れ、社会からの「薬漬け」の批判なども多く、倉吉病院では単剤化に取り組み、誰の目から見てもわかりやすい処方に取り組んでいる。

心理社会的療法には生活技能訓練、心理教育、精神療法、作業療法、デイケア、就労支援などがある。そうだが、これらの治療には一般的な医師と違う視点が必要だと言えよう。一般科の医師は通常、患者さんの悪い所を見つけて治療します。しかし、精神科での精神療法及び心理社会的療法では、患者さんの長所を伸ばすことが治療の主眼となります。治療のゴールは、患者さんが望む生活ができるようになることと、悪い部分をすべて治していくことではありません。ですから、研修医には、長所を見つけてアプロウチするように指導しています」。

「停滞は後退」。 あらゆる面で常に前進する

地域に開かれた病院として、親しまれてきた倉吉病院。年に二度開かれる『ふれあいハート祭り』には市民約5000人が参加するそうだ。また、外来病棟に併設された『地域交流センター アゼリアホール』は、研修会、レクリエーションなど多目的に市民に利用されている。

救急体制、将来への展望、地域との交流、人材育成などさまざまな面で活動を行っている倉吉病院。理事長の考えである「停滞は後退」を体現するかのようには、病院内に溢れる活き活きとした雰囲気印象に残った。



地域の方に低額で貸し出されている「地域交流センター アゼリアホール」。



DATA

医療福祉センター 倉吉病院
見学などのお問い合わせ先

医療福祉センター
倉吉病院

〒682-0023
鳥取県倉吉市山根43
TEL:0858-26-1011
FAX:0858-26-4794
URL:https://www.med-wel.jp/kurabyou/



外来の診察室。外来棟は病棟とは別の建物にあり、外来患者の利便性に配慮している。

Our Story

鳥取県立中央病院

鳥取県東部医療圏の基幹病院として、救命救急センター、地域周産期母子医療センター、地域がん診療連携病院の指定を受けている鳥取県立中央病院。高度・急性期医療の総合病院である同院では常時約20名の研修医を受け入れ、実践的な教育を心がけている。指導医である岡本勝先生、研修医2年目の福田詩織先生、研修医1年目の井上直也先生の3名がそれぞれの視点から研修について語る。

〈研修医1年目〉
井上先生

〈研修医2年目〉
福田先生

〈指導医〉
岡本先生

研修先の決め手は
*クリニカル
クラークシップ

〈研修医〉福田先生 大学5年生、6年生のときに色々な病院を拝見しました。二次から三次までの色々な患者さんを診たいと思っていたので、市中病院が最初から選択肢にあつたのですが、決め手になったのは、この病院でのクリニカルクラークシップです。

神経内科のクリニカルクラークシップを2週間経験したのですが、知識を教えていただくだけではなく、一人の患者さんを診察し、検査を予定し、診断に至るまでの過程を学生の私に実際に考えさせて下さり、とても勉強になったことを覚えています。

〈研修医〉井上先生 私はそれほど多くの病院をまわったわけではないのですが、見学に来た時に研修医室で、研修医の方同士が楽しそうに話しているのが印象に残りました。ちょっとしたことですが、コミュニケーションに不安がなさそうというのは重要ですね。もちろん、

※クリニカルクラークシップ(Clinical clerkship)とは、従来の見学型臨床実習とは異なり、学生が医療チームの一員として実際の診療に参加し、より実践的な臨床能力を身につける臨床参加型実習のことである。



研修医 / 研修1年目

井上 直也 いのうえ なおや

2015年 自治医科大学卒業
2015年 鳥取県立中央病院にて研修医

●趣味:軽音楽鑑賞



色々な科がある、総合的に学べるというのも決め手です。

岡本先生 当院の夜間救急外来では、当直医のほか、1年目と2年目の当直医がペアになって勤務します。ファーストタッチは、研修医がすることになっているので、幅広く色々な患者さんを診るようになるのです。当院のこの仕組みは、本当に医師としての成長を促すのではないかと思っています。自分が当直の時に、久しぶりに一緒になった研修医を見て、本当に成長したなと感じることが、何度もあります。そういう意味でも当院での研

修は、実践的で理にかなっていると感じます。

〈研修医〉福田先生 当直はだいたい月に4回ぐらいです。夜間の救急では軽症〜重症まで大勢来院されます。中には緊急性のない方もおられますが、それでも訴えには十分耳を傾け、しっかりと話して納得されて帰っていただけるように心がけています。

医師として

患者とどう向き合うか

〈研修医〉井上先生 実際の医療

現場に立ってみて、学生時代のイメージと違うのは、意外にデスクワークが多いということでしょうか。研修医1年目ということですが、わからないことも多いのですが、当院は、部署の垣根がなく誰にでも相談しやすい雰囲気があります。同僚や先輩はもちろんなのですが、薬剤師の方や検査技師の方にも気軽に質問できるところがありがたいですね。誰かから影響を受けるといっても、色々な先生のスタイルを見て学んでいる最中です。患者さんに対するときの表情や身振り手振りなどもすごく

勉強になっています。

〈研修医〉福田先生 尊敬できる先生は大勢います。その中でも岡本先生からは患者さんへの接し方で学ぶことが多いです。患者さんの病気だけでなく、生活背景までしっかり診ておられ、地域に根ざした医療をされておられる感じがします。また、ペテランの医師になっても、日々勉強され、謙虚な姿勢で医療と向き合っておられる姿勢は大変尊敬します。

総合的な視野をもった
専門医を目指して欲しい

岡本先生 二人の話のように、実践的な医療を先輩の先生から学ぶということも大切なのですが、研修医時代に社会人としての最低限の嗜みを身につけることも大切だと考えています。医師は一般の企業に勤める方と違って、そういった教育があまりありません。時間を守る、あいさつをするといった基本的な部分も社会人としては重要です。

医療に関する知識や技術は必要なのですが、医師でいる間はずっと勉強し続けることになりまので、初期研修の2年間では「医



指導医 / 総診療科部長兼消化器内科医長兼救命救急センター副センター長

岡本 勝 おかもと まさる

1998年 自治医科大学卒業
2007年 鳥取県立中央病院勤務
2008年 鳥取県立中央病院 内科医長
2014年 総診療科部長兼消化器内科医長兼救命救急センター副センター長

●趣味:ランニング、読書

師として患者さんどう向き合うか」を考えて欲しいです。その上で、医師として必要な知識を幅広くしっかり身につけ、専門医であつても総合的な視野を、総合医であつても何か得意分野をもってもらいたいですね。研修医と接する上では、褒めるだけでなく「叱る」ことを意識しています。私が研修医だった頃は上下関係も厳しく忙しい毎日を送っていました。今の環境の方が当然



鳥取県立中央病院

〒680-0901 鳥取県鳥取市江津730

高度・急性期医療の総合病院で、鳥取県東部医療圏の基幹病院。救命救急センター、地域周産期母子医療センター、地域がん診療連携病院の指定を受けている。地域の医療機関と連携した地域支援病院でもある。また、教育・研修・臨床研究の病院となっており、医学生・看護学生・研修医が研鑽している。2018年秋に新病院開院予定。



研修医 / 研修2年目

福田 詩織 ふくたしおり

2014年 鳥取大学医学部卒業

2014年 鳥取県立中央病院にて研修医

●趣味:登山

地域や人に親しまれる 医師になりたい

良いと思いますが、叱る方が少なくなつたような気がします。「叱る」というのはある意味では評価です。自分が評価されなくなると人は成長できませんから、私は少々嫌われても必要なときには叱ろうと思っています。



〈研修医〉井上先生 私は二言で言え「親しまれる医師」になりたいです。身近に感じてもらえる、なんでも話してもらえそうな医師です。

〈研修医〉福田先生 この鳥取の地で、自分の専門科の疾患だけでなく住民の方をまるごと診ることのできる医師になりたいと思っ

ています。私は医師を目指したきっかけが、自宅近くの入院、往診もできるホスピスでした。今でも訪問診療や在宅ホスピスに大変興味があるので、将来は病院で患者さんを診るだけでなく、自分が病院から出て、家にいる住民の方を診たいです。

何にでも、どこにでも 学ぶところはあ

〈研修医〉福田先生 2年間、日々学ぶことだらけです。自分で主体的に動き、指導医の先生や患者さんからどんどん学んでいってほしいです。鳥取県は自然環境豊かで静かな、腰を落ち着けて2年間研修するにはとてもいい土地ですので、ぜひ研修場所として考えてみてください。

鳥取県はエスカレーターで歩く人がいない…そんなのんびりした場所です。勉強するには良い環境だと思います。

岡本先生 当院は2018年には、500床の病院になり高度医療に特化していきます。知識的にも技術的にも最新のものが経験できる病院になるだけでなく、福祉保健とも連携して地域に密着した病院を目指します。ぜひ、当院での研修を検討してほしいですね。そして、総合的な知識、技術をも身につけた上で、得意分野を見つけてほしいです。



研修医のリフレッシュの場ともなっている研修医室。約20名の研修医のデスクがある。

鳥取県で働いてみませんか。

見学を希望される方へ

県外の方で病院見学を希望される場合は、旅費を支給します。

鳥取県は医師のキャリア形成、子育て後の復職などについて積極的に支援しています。

地域医療に関心のある方へ

鳥取県医師登録・派遣システム (ローテートコース)

複数の公立病院等をローテートしながら、鳥取の医療の現場を経験できます。(その間に研修を行うことができます)

子育て等で現場を離れ、復職を考えている方へ

鳥取県医師登録・派遣システム (子育て離職医師等復帰支援コース)

鳥取大学医学部附属病院ワークライフバランス支援センターと協力し、現場復帰のための研修を県立病院、鳥大附属病院等で行います。研修後の復職についても、仕事と家庭の両立に配慮した医療機関を紹介します。

キャリア形成を考えている方へ

鳥取県専門研修医師支援事業

県外の医療機関に県職員として研修派遣します。

鳥取県内の求人情報を探している方へ

県内医療機関の求人情報の提供、あつせん、紹介を行います。

<http://www.pref.tottori.lg.jp/iryouseisaku/>

鳥取県 医師確保

検索

鳥取県で初期臨床研修をしませんか。

鳥取県は県と県内臨床研修病院が協議会を立ち上げ、研修医のための様々な取り組みを行っています。また、医学生が県内臨床研修病院を見学する場合には旅費を助成しています。

鳥取県臨床研修指定病院協議会の事業

- 研修医の受講する救急講習 (ACLS、BLS、ICLS、JMECC) 受講料を助成します。
- 年1回各病院の研修医が集まる研修医交流会を開催します。
- 研修医を対象とした著名講師による臨床研修医セミナーを開催します。
- 鳥取県東部4病院 (県立中央病院、鳥取市立病院、鳥取赤十字病院、鳥取生協病院) にマッチングした研修医は、様々な特色を持つ4病院で希望に応じた研修を行うことができます。

鳥取県臨床研修指定病院協議会のホームページをぜひご覧ください

鳥取県の臨床研修病院の魅力を知っていただくため、ホームページを作成しています。各病院の最新情報、プロモーションビデオなど魅力満載ですので、ぜひご覧ください。



<http://www.tori-rinsyou.jp/index.php>

鳥取県 臨床研修

検索



このみずみずしさを未来へ

鳥取県

お問い合わせ

鳥取県福祉保健部健康医療局医療政策課医療人材確保室

〒680-8570 鳥取県鳥取市東町1-220

TEL:0857-26-7195 FAX:0857-21-3048 Mail:ishikakuho@pref.tottori.jp